

ダイ族の住生活とその展開

—西双版纳ダイ族自治州での採取から、その1

○塩谷寿翁* 沖田富美子** (*大阪工業大、**日本女大)

目的・方法：近年にダイ族（タイ・ルー族）の住居の採取をおこなっている（注）。この稿では、ダイ族の住生活のしくみの展開についてのみかたを試論としてしめしてみたい。

少数民族に伝統的にたもたれ継承されてきた住生活のしくみは、現代文明化とのあいだで相克している。その進行によってもたらされる変化は、どのようにうけとめられているのか、現代文明化とダイ族の固有の住生活のしくみとのかかわりあいかたはどのような段階にあるのか、などの視点をもちながら住居にあらわれる連続性と変化とをさぐる。

結果の要約：ダイ族の住居は高床の上階におもな居住面のあるものである。ここには堂屋と臥室（ナイソン）とがおかれる。堂屋にはナポン・ガンフンなどとよばれる場的な領域が存在する。この領域は日常の生活場面でおこなわれる行為の場のひろがりかたに関係している。ダイ族の住生活のおこなわれかたは家族における老若・性べつ、ムラ社会における個と個のあいだの位置関係に支配される。またナイソンのおくまった位置におかれる家族の守護霊（デュウラ・ヘン）の存在は行為の場的な領域の形成のされかたとつよく関係している。これらのダイ族の住生活のしくみは近年にかわりつつある。それは家族にとってウチ向きの生活場面からすすんでいる。

つづいて住生活のしくみの連続性と変化を人びとの行動的側面からとりあげる追究をおこなう。

（注）1995年3月から4月にかけて、中国雲南省西双版纳ダイ族自治州モンハン鎮曼乍村（48戸）で採取をおこなった（宮崎玲子・宮崎祐子・下原拓也・西尾真一・青木理香と筆者らが共同）。またこれにさきだって1993年8月から9月に、おなじモンハン鎮の曼竜代村（63戸）で予備的な採取をおこなっている（大阪市立大学・大阪工業大学ほか6つの大学の研究者が参加）。